

## 尾道商業会議所記念館 第25回企画展示解説

2014年9月12日～2015年1月7日

テーマ 尾道商人と茶の湯、茶園、そして道薫

尾道には、「茶園」（さえん）と呼ばれる商人達が営む別荘・庭園が競うように林立した。別荘を茶園なる語で呼ぶのは尾道の町独特であるが（茶園一般は茶畑を意味する）、しかし何故、お茶の園なのか？

はっきりとした由来は何も伝わるものは無いが、それらの別荘及び庭園の内には、ほぼ決まって茶室が設けられ、何れもこだわりを見せた見事なものも多く、そこを舞台にしての茶の湯の嗜み・交わりも盛んであった。また、文人墨客の往来もそれに彩りを添えるなど、茶園は単なる別荘ではない、質の高い文化サロンとしての機能も果たした。こうした商売を離れたところでの商人達の文化的営みは、町の文化力向上にも寄与し、今に続く芸術文化都市の礎を築いた。

そうした茶室・茶の湯の存在感が、こちらもこだわりを見せた庭園と結びついて、茶園なる語を生み出した…そのように想像されて来るのである。

何れにせよ尾道に見る茶園文化は、茶室の多さにも比例し、この町に古くからお茶を楽しむ・嗜む文化が、濃厚に香っていたことを物語っている。

茶園文化は主に江戸時代以降の産物で、それ以前の中世に遡ると、遺された文献や資料も乏しく、当時の尾道におけるお茶文化を偲ぶことは難しいが、史実か虚構か判然としない伝承世界の内には、かの太閤豊臣秀吉を、尾道の豪商がお茶でもてなした…また、秀吉と繋がる戦国武将で、後に茶人となった荒木村重が、尾道へ身を隠していた時、古寺の庵で茶の湯に耽っていたなどという逸話・秘話が、まことしやかに今に語り継がれるなど、近世同様に商人達の手によって、お茶の文化は深く浸透していた形跡は、これら伝承の背景に匂われて来る。

茶園文化が花盛りを迎える近世江戸時代以降（とりわけ後期）、藪内流がまず尾道にもたらされ、尾道から同門の宗匠（指導・教授者）として、内海自得齋なる茶人も輩出するなど、同流派が尾道における茶の湯の主流を形成するに至る。

次いで幕末頃になると、速水流3代家元（速水宗寛宗匠）が来尾すると、尾道の豪商・天野家の主人・天野半次郎、天野嘉四郎（尾道町年寄同格、尾道商業会議所設立発起人）が入門し、天野家を中心として速水流が尾道にも広がっていくことになった。

近代以降になると、女学校の茶道が裏千家流を採用したことも手伝って、また、裏千家13代家元（圓能齋宗匠）が、地元の師弟を訪ねるなどして交わりを深め、裏千家流の茶道が尾道に浸透してゆき、尾道の茶の湯は更なる拡がりを見せた。

本展示では、茶の湯の視点から尾道の歴史・文化を見つめ、主にそれを受容した尾道商人との絡みにおいて概観してみたい。



藪内流の天目台  
※三原・山崎家蔵



天野嘉四郎の肖像画  
※尾道市教育委員会蔵



橋本家茶園・爽籟軒「妙（明）喜庵」茶会記  
※広島県立文書館蔵



天野半次郎から速水宗寛へ宛てた書状  
※広島県立文書館蔵

### 太閤秀吉に最上のお茶を献じた尾道商人

長江山城戸の先の裏路地に、「柳水井」と名付く古井戸がある。現在は飲料水として用いることは出来なくなっているが、戦国時代の世には、尾道町内で最も美味なる水として賞された過去を秘める。

1592（文禄元）年、朝鮮出兵を進める太閤豊臣秀吉が、九州名護屋城（佐賀県唐津市）から大坂城へ戻る道中、尾道に宿所を求めた。この時、秀吉一行を迎え入れたのは、毛利に繋がる尾道商人で、後に当地方の代官職も務める笠岡屋の主人・小川又左衛門であった。

又左衛門は、茶人としても知られた秀吉を、美味しいお茶でもてなそうと、尾道町内に点在する井戸水から最上の水を探し出させ、その結果、尾道一の水として選び出されたのが、この「柳水井」であった。

こうして柳水井の水で点てたお茶を秀吉に献じ、喜ばれたという。

「柳水」の名はこの時に付けられたともいわれ、お茶のみならず、秀吉一行が食すその他の飲食の水にも用いられたという。

尾道を出発した秀吉一行を、神辺（福山市神辺町）まで見送った又左衛門は、別れ際、秀吉自らの手で差し出された銀錢を、褒美として賜ったと伝えられている。

また、太閤を通した部屋は、「太閤御座の間」として、後の世まで語り継がれ、江戸時代の地元文献にも記される。

笠岡屋の屋敷は、西国街道筋、現在の本通り商店街沿いに位置し、江戸時代を通して大名クラスの賓客が滞在する「本陣」として機能した。

本陣屋敷は既に跡形も無いが、屋敷跡に並行して通る路地の名「小川小路」に、かすかな名残を留めている。

なお、柳水井の背後には、頼山陽の高弟であった地元の文人・宮原節庵の筆で刻む由来碑が建つが、肉眼では判読することが難しくなっている。



柳水井  
（尾道市長江に所在）

## 秀吉・利休ゆかりの茶室「露滴庵」

2014（平成26）年秋に平成の大修理を完了する国宝の寺・浄土寺には、秀吉と千利休、古田織部ゆかりの茶室が現存している。名を「露滴庵」といい、国指定名勝・浄土寺庭園の内に建つ国指定重要文化財の茶室である。

秀吉が自身の隠居所として、京都に築いた伏見城の内に建てられた露滴庵は、藪内流の庵号で茶室形式「燕庵」を写して造られたもので、「燕庵」は利休の弟子・古田織部が創出した茶室である。

秀吉天下の時代から徳川太平の世に移って以降、露滴庵は、秀吉次いで徳川に仕えた武将・浅野家の手に移り、広島藩主となった浅野家と共に来着した御用商人・富島家の手に更に移った。

富島家は屋号を天満屋といい、向島沿岸部を中心に塩田経営を展開した浜旦那であった。

浅野家から露滴庵を賜った富島家は、向島沿岸の鳥崎に構えた茶園「海物園」に露滴庵を移築した。海物園には文人墨客や公卿、浅野家の若君らが訪れているが、これら賓客の接待に、露滴庵も大いに活躍したことであろう。

1814（文化11）年、富島家の主人・富島浄友によって、露滴庵は浄土寺に寄進されるに至り、庭園の内に移築されて、今に遺るのである。



浄土寺庭園に移築された茶室「露滴庵」

露滴庵の概要  
 (中門：切妻造、棧瓦葺、矩折延長9m余)  
 (茶室：入母屋造、茅葺、三畳台目茶室、水屋及び四畳、四畳半の勝手)

## 挹翠園と煎茶の痕跡

茶園に見る茶の湯は、その大半が抹茶であったことは言うまでもないが、千光寺山（大宝山）東斜面に見られた茶園では、煎茶も盛んであった形跡が認められる。

長江の山城戸上に、江戸時代後期の1751～64年（宝暦年間）、御調郡の割庄屋であった熊谷氏（屋号・金屋）が営んだ茶園があり、名を「挹翠園」といった。

その園内には、梅林、竹林、松林が広がり、巨岩・奇岩も茶園の景観に趣を添え、岩肌を流れ落ちる滝も見られたようである。

頼山陽、田能村竹田といった著名な文化人も挹翠園を訪れ、その風雅なる景を楽しみ、山陽はこの時の情景を『遊挹翠園記』にしたためているほどである。

この茶園本体部から少し離れた竹林の中から、素焼きの土器片が大量に採集されており、その殆どが失敗作を投棄したものであることから、茶園独自の窯を設け、園で用いる器を焼いていたものと推定されている。

それら採集された土器を分類すると、煎茶器と推定される土器が多く目につくことから、挹翠園での茶の湯の嗜みが、主に煎茶道であった可能性は高い。

現在、尾道市内に見る煎茶道の流派としては、三葵亭賣茶流、一茶庵、煎茶道方円流などがあり、この内の一茶庵では、昭和初期に宗匠（流派中興の祖・佃一茶）が来尾し、長江にある日蓮宗妙宣寺で講習を開いていた記録が残っている。



玉浦焼を刻印する絵皿  
 ※宮野家蔵



挹翠園窯で焼かれた陶磁器類  
 ※尾道遺跡発掘調査研究所蔵

## 尾道の主な茶室の一覧

茶室の名	所有した商家 (屋号)	所在地	流派・備考
露滴庵	富島家 (天満屋)	向島町鳥崎海物園 ↓ 東久保町浄土寺へ	藪内流
明喜庵	橋本家 (加登灰屋)	久保本通り東端	京都山崎の 妙喜庵の写し
聴松庵	島居家 (住屋)	長江の屋敷内 ↓ 東土堂山手へ	同家の江戸期は 藪内流
土足庵	島居家 (住屋)	東土堂山手の 屋敷内	戦後に同家の 当主が造作
時雨亭	島居家 (住屋)	東土堂山手の 屋敷内	煎茶道一茶庵
亀泉庵	不明	西久保町浄泉寺内	上田宗箇流
賀島園の茶室 庵号不明	松本家 (泉屋)	向東町沖合の加島	不明
挹翠園の茶室 庵号不明	熊谷家 (金屋)	長江1丁目山城戸	煎茶道か？
霞仙亭	青山家	栗原町	煎茶道一茶庵
蘭亭	赤松家	久保2丁目	煎茶道一茶庵
蘆庵	宮野家	久保3丁目	煎茶道一茶庵

ここに挙げた茶室は確認出来ている主要なものに限られ、この他にも茶室は多く点在している。

## やぶのうち 藪内流の茶人・内海自得齋

尾道に根付いた最古級の茶道流派が、藪内流である。この藪内流を尾道に広める上でキーマンとなったのが、尾道の茶人・内海自得齋であった。

内海自得齋は、屋号を住屋といい、本名は助三郎といった。自得齋は、藪内流の宗匠としての名である。静観庵如隠（読み不詳）の別号もある。

助三郎は、1816（文化13）年5月、藪内流に入門し、その道を究めて宗匠となり、尾道にあって藪内流を広めることに尽力した。

尾道の茶人・内海自得齋は、東久保の山王社（山脇神社）参道入り口辺りに住いた。自得齋の庵には、頼山陽、田能村竹田、浦上春琴などの文人墨客、地元では橋本竹下、亀山夢研といった文化人として知られた尾道商人が入り出し、親しく交わり、サロンを形成していたようである。この内の橋本竹下は自得齋の門人の一人であった。

1834（天保5）年には、来尾した田能村竹田が自得齋の庵に長期滞在（橋本家の屋敷にも滞在）。その折、竹田は、自得齋、橋本竹下、亀山夢研らと共に千光寺山へ登り、花瓶に生けて楽しんだ梅やザクロの枯れ花を、千光寺鐘樓の傍に埋め、酒を注いで弔い祀るという趣向を楽しんでいる。そして詩歌を詠み、歌碑まで建てている。この碑は「瘞紅碑」と称し、鐘樓と玉の岩の間にある。因みに瘞紅とは、紅（=花）を瘞（埋）めるという意味からきている。

同じく今に残る碑で、自得齋の庵とも近い県立尾道東高校の正門傍らには、頼山陽の揮毫で、自得齋が建立した「往来安全」碑がある。建碑当時は防地川沿いの西国街道筋の路傍に建ち、後に県立尾道東高校の校内に移設された。

自得齋は1858（安政5）年7月7日に没し、浄土真宗浄泉寺（西久保町）の墓所に眠る。



えいこう 瘞紅碑  
（千光寺境内）



内海自得齋の書画  
※妙宣寺蔵

## あらきこうらい 大名物 荒木高麗と茶人・道薫

尾道へ身を隠し、茶の湯に耽っていたという逸話のある荒木村重。愛知県の徳川美術館には、唐草文が印象的に映える高麗茶碗があり、銘を「荒木」、通称「荒木高麗」とも称され、村重愛蔵の名品という歴史を秘めて、今に伝えられている。

信長の下で奮戦し、摂津一国の国主にまで昇り詰めた勇猛なる武将、信長に反旗を翻して以降の転落、自らを道の糞であると蔑み（道糞を名乗り、後に秀吉の命で道薫と改名）、それでも生き続けるその後…

荒木高麗の美の裏側には、村重の喜び、怒り、哀しみ、楽しみの喜怒哀楽の全てが宿っているかのようなのである。

茶碗は中国南部産の呉須絵陶器（呉須…陶磁器に用いられる顔料の一種）と見られており、唐草の文様が見込み部分と外部側面に呉須によって描かれているが、高台を除き、内外にかけられた乳白色の釉のため、その文様には不鮮明さがある。

大河ドラマ「軍師官兵衛」の劇中（有岡城を初めて訪れた官兵衛に、村重自身が茶の湯を振舞うシーン）では、足利將軍家ゆかりの大名物、それを師匠である千宗易（利休）から賜ったものとして、惚れ惚れと茶碗を愛でる村重の姿が描かれ、荒木高麗をイメージさせるものがあつた。

原物の荒木高麗は、千利休、徳川家康の手を経て、尾張徳川家に伝えられて今に現存する。

利休の下で茶の湯を学んだ村重は、文化的素養が高かったと見えて、茶道に傾倒し、後に「利休十哲」（千利休の弟子として名だたる10人、他に七哲の括りもある）の一人に数えられる村重は、戦国乱世に呑み込まれ、波乱万丈且つ数奇な生涯・末路を辿った男であった。

## 尾道茶の湯歴史年表

西暦	元号	事項
1580 ┆ 1583	天正8 ┆ 天正11	信長に反旗を翻した荒木村重が毛利に亡命、備後尾道に隠遁（『陰徳太平記』他）。尾道隠遁中、古寺の庵で茶の湯を嗜むと伝（地元の口碑伝承）。村重は後に堺へ居所を移す。
1592	文禄元	豊臣秀吉が九州名護屋城から大坂城への帰途（朝鮮出兵時）、尾道に宿所を求め、本陣屋敷の豪商・小川家（笠岡屋）がこれを接待。主人の小川又左衛門は、尾道町内の名水で茶の湯を点て、これをもてなしたと伝（『小川家文書』）。
元禄年間 (1688~1704)		秀吉・利休ゆかりの茶室で、元は桃山城の内にあった「露滴庵」（燕庵）が、徳川家から広島藩主となった浅野家の手に渡り、次いでその御用商人であった富島家（天満屋）に移り、同家が向島に構えた茶園「海物園」の内に移築される。
1751 ┆ 1800	宝暦元 ┆ 寛政12	藪内流6世竹陰宗匠が、中国～九州方面において藪内流を広める。尾道においても同時期が藪内流の全盛期と見られる。
1814	文化11	富島家（天満屋）から、茶室「露滴庵」が浄土寺へ寄進される。

1816	文化13	5月、尾道の内海自得齋（本名・助三郎、屋号・住屋）が、藪内流に入門。以降、尾道における藪内流の中心人物となる。
天保年間 (1830～1843)		内海自得齋が、頼山陽の揮毫※1になる「往来安全碑」を、居所近くの西国街道筋にあたる防地川沿いの路傍に建立。碑は尾道東高校敷地内（正門傍）に移設され現存。同石碑は最古の交通安全標識とも目される。
1834	天保5	南画家・田能村竹田、内海自得齋を訪ねる（『竹田年表』）。
1858	安政5	3月、尾道の豪商・天野家（東屋）の天野半次郎、天野禎から、速水流3代家元・速水宗寛先生宛に、書簡が届けられる（『茶事稽古につき條々』・広島県立文書館蔵）。
		7月7日、内海自得齋没。
1859	安政6	3月10日正午、橋本家の茶園「爽籟軒」庭園内の茶室「妙喜庵」で茶会（『橋本吉兵衛折紙綴』・広島県立文書館所蔵）。
		9月、速水宗寛、尾道を訪れる。この時、天野家の天野嘉四郎が速水流に入門する。以後、天野家が尾道における速水の中心的役割を果たす（『姓名録』・東北大附属図書館蔵）。また同年には肩を並べる豪商・嶋（島）居義右衛門（住屋）も入門。
		豪商・亀山元助（油屋）、藪内流の『点茶記事簿』を书写。
江戸後期		小堀遠州に始まる武家茶道・遠州流が尾道へ伝えられる。
1863	文久3	3月末、浄土寺庭園の茶室・露滴庵で茶会。流派は藪内で、席主は浄土寺、客には速水流の天野半次郎等を招く（『会記』）。
1868	慶応4	3月、山荘に於いて、還暦賀茶会（『同茶会記・主』、『天野梅澗切継紙』・広島県立文書館所蔵）
明治初期		藪内流10世休々斎竹翠が、長江の井上家茶園の庭園を造園。
1873	明治6	内海自得齋の息子・助三郎、藪内流に入門。
1875	明治8	速水宗寛、秀吉と小川家の伝承（年表冒頭記載）において、名水として語られる長江の「柳水井」を調べる。

1877	明治10	速水4代家元速水宗波が尾道を訪れ、席主となって稽古茶事を複数回に亘って催す。
明治後半 （大正期）		尾道の高等女学校の茶道が裏千家を採用するに至り、教室もその数を増やすが、速水流も引き続きの隆盛を保った。
1913	大正2	宮本宗超氏が、師事する裏千家の家元円能齋宗匠写しの居宅を久保町蓮華坂に新築、茶席抜きに円能齋宗匠夫妻も参列。
1914	大正3	裏千家の淡々齋若宗匠が宮本邸訪問、西郷寺にて茶会を催す。
1951	昭和26	各流派合同による尾道茶道会発足、会長に島居哲氏。
1975	昭和50	上田宗箇流家元の所へあった茶室が、広島市内の個人宅から尾道の浄泉寺へ原形のまま移築される。
1976	昭和51	長江山城戸の竹藪から、近世期に焼かれた大量の土器片が発見され、その大半が煎茶器であった。同所に窯が設けられていた形跡があり、窯は近接する同時代の茶園「挹翠園」に附属したものと見られている。

※1 揮毫…毛筆で字・絵を描くこと

#### 年表作成の参考資料

尾道案内／吉田松太郎／備後案内社／1915  
尾道市史・中巻／青木茂編著／尾道市教育委員会／1940  
新修尾道市史・第六巻／青木茂編著／尾道市教育委員会／1977  
尾道と茶の湯／朝井柁善／  
『尾道市文化財春秋』第13号所収／尾道文化財協会／1977  
幕末から明治における尾道の茶の湯  
－藪内流茶道と速水流茶道－／井上秀二  
／裏千家淡交会尾道支部50周年記念誌『雪月花』所収／1999  
尾道における裏千家茶道史／山根宗重  
／裏千家淡交会尾道支部50周年記念誌『雪月花』所収／1999  
青木茂収集文書／広島県立文書館蔵